

【研究ノート】

障害者受容に関する大学生の
意識の変化について
— 共生を目的とする質問紙調査 —

豊村 和真

研究ノート

障害者受容に関する大学生の意識の変化について —共生を目的とする質問紙調査—

豊村 和真

Kazuma TOYOMURA

目次

[はじめに]

[方法]

被験者

手続き

[結果]

因子間相関について

全体の傾向

クラスター分析の結果

ベクトルグラフによる結果

対健常と対障害の差について

その他の要因の変化について

[考察]

安定群と変動群について

対健常と対障害の差について

その他の要因について

[引用文献]

[資料]

[はじめに]

障害者と健常者とのよりよい状態の共生を望むならば、まずは互いの相手に対する態度を考慮する必要があると思われる。健常者の障害者に対する態度を改善するためには、その現状を知る必要がある。単純に人数比の視点からでもメジャーな集団である健常者の、障害者に対する態度を調査することは重要で

ある。しかしながら従来調査による回答には二つの問題点があった。

一つは、障害者の行動に対してのみ、質問することである。

仮にその行動が非受容的だったとしても、それはただちに、例えば、障害者に改善をお願いするような行動ということにはならない。わかりやすい例をあげると、たとえば、地域での共生について、障害者が「ゴミの分別収

キーワード：障害 受容 共生 縦断法

Key words : disability acceptance; symbiosis; longitudinal method

集に協力しない人である」場合に非受容的とされたら、「障害者はゴミの分別収集することが共生には重要」というような結論にすぐになってしまいがちであるが、健常者についても同じように非受容的である可能性がある(むしろ高いのではないか)。すると分別収集は障害者との共生のために重要な行動ではなく、人一般についていえる行動と考えるのが妥当であるということである。

つまり障害者の行動について問う(以後これを「対障害」の問いと略)質問は、健常者の行動についても問う(同じく「対健常」の問いと略)必要があり、その差を比較検討するのが重要であると思われるが、このような形式の問いかけは従来ほとんどなされていなかった。

もう一つは結果の安定性(信頼性)が不明なため、どの程度安定した結果(再現性)が得られるのか判断できないことである。これは一般的な質問では、十分な回答数が得られればある程度はこの問題を回避できると思われるが、態度については、対象に関する知識の程度や接触経験など多くの心理的要因に左右されるといわれており(川間, 1996など)、必ずしも一度の大量な回答で充分であるとは言えない面がある。むしろ、複数回同じ対象に質問をするパネル調査を実施し、再検査信頼性等を調べることが重要と思われる。本報告では同一被験者に2回の調査を実施しているため、再検査信頼性を求め分析の際に考慮することとする。

本研究では、以上の2点の問題点について検討するため、上記の問題点をできるだけ回避する縦断的手法に従った大学生の障害者に対する態度(受容度)変化を報告する。具体的には2018年及び2022年にそれぞれにおいて同一協力者に2度、同一内容の調査を実施した結果を報告する。

[方法]

被験者：2回以上の回答を得られ、欠損値がない大学生総被験者196名(2018年は男性31名、女性66名、小計97名、2022年は男性16名、女性83名、小計99名)であった。

手続き：必修科目の講義科目の時間内で2回以上調査を実施した。実施間隔は各年4月～8月に実施したため約3ヶ月であった。なお2018年は対面で紙による調査であり、2022年は1回目はWEBで、2回目は教室でWEB入力させた。項目の文言等はまったく同じであった。調査用紙は、学年性別等のフェイスシートに加え、「あなたの住んでいる地域に、これからAさんという人が住もうとしています。もしAさんが以下のような人だった場合、同じ地域で暮らしていく上であなたはAさんのことをどの程度受け入れられますか？」という問い(対健常)と、下線部分Aさんを「Bさんという障害者」または「Bさん」に置き換えた問い(対障害)の下、以下の質問項目があった。

質問項目として、以前の調査(豊村, 2014)によって得られた4要因から3項目ずつを選び、12項目を使用した。因子名と各項目の略記形は、1)人当たり(「意地悪」「不快行動」「和を乱す」)2)人付き合い(「地域活動無」「近所付合無」「非社交的」)3)社会適応力(「周囲孤立」「無職」「会話未成立」)4)見た目(「顔立不整」「格好悪い」「可愛くない」)である。これらについて7件法で受容度を回答させた(不可1～可7)。

なお、質問項目の並びはこの順ではなく、また対健常用と対障害用で異なっていた。

これらの回答後に、回答時にイメージしていた障害の種類(精神障害、知的障害、身体障害、障害全般、その他から選択記述)、過去1ヶ月以内の障害者との接触経験の有無、その自発/非自発性、そして経験の快/不快

の程度、最後に再接触の希望の有無を回答させた。

ここで、縦断的な手続きのメリットを活かし、以下のような手順を踏んで被験者を2分した。まず約3ヶ月位の期間では一般の健常者に対する態度(=対健常態度)は、それほど変化しないと仮定した。そこで上記1)～4)の項目の各因子得点(各3項目の平均値)の値の合計値が、1回目と2回目で4以上変動する場合変動群、それ以下に収まっている場合安定群とした。これにより再検査信頼性が高いと思われる安定群とそうではない変動群に区分した。

なお、本研究は北星学園大学倫理審査委員会の承諾を受けた。またフェイスシート部最後に「本アンケートのデータを研究目的で使用してもよい」というチェック項目があり、回答者の同意を得た。

[結果]

各年において対健常1回目と対健常2回目の差が4以内の者を安定群、それ以外のものを変動群とし、以後の分析は主として安定群について行うこととした。

結果として2018年安定群は男性20名、女性50名の小計70名、2022年は男性13名、女性63名の小計76名合計146名となった。

各質問項目を因子ごとに集計し、分析の単位とした。その表記については因子名(人当たり、人付き合い、社会適応力、見た目のどれか) __対象(対健常をしめすN、対障害を示すh、のどれか) + 1回目か2回目かの値で、例えば「見た目_N2」とあれば「見た目」因子で対健常の2回目のデータを示すこととした。

因子間相関について

安定群の相関を表1-1に示す。濃い色は

同じ群の1回目と2回目の相関、薄い色は同じ回の対健常と対障害の相関を示している。最も低いのが人当たり_N2と人当たり_h2間の0.635であり、最も高いのが見た目_N1と見た目_h1の0.898であった。総じてかなりの相関関係が見られた。

一方変動群(表1-2)においては、社会適応力_N1間と社会適応力_h1間の-0.052が最も低かった。同じ群の1回目と2回目は総じて相関が低く(最高で社会適応力_N1と社会適応力_N2間の0.470で、有意なのは3組)、むしろ同じ回の対健常と対障害の相関が、0.408～0.850と高く全ての組で有意だった。1回目と2回目の比較(濃い色)では全て相関は安定群>変動群であった。

全体の傾向

全体の傾向を概観するために、因子ごとに得られた4データの平均値を出力し、年次と回および対象別のデータの増減の様子を示した。つまり、対健常対障害、1回目2回目の各条件で4つの平均値が因子ごとに得られるが、その平均を求め各因子の受容度とみなした(図1)。

対健常(_N1, _N2)と対障害(_h1, _h2)の受容度は全て対健常<対障害となった。つまり、障害者に対して健常者よりも受容的であった。

2018年と2022年の横断的变化は、対健常は2022年で全て上昇、対障害1回目は上昇、対障害2回目は低下となった。

同年1回目と2回目の縦断的变化は、対健常はほぼ同じだが、対障害は2018年は上昇、2022年は低下していた。

クラスター分析の結果

安定群についての因子別対象別回別の要因 $4 \times 2 \times 2 = 16$ の値を用いて、ウォード法によるクラスター分析を実行した。処理はHAD(清水, 2016)を利用した(図2)。

表 1 - 1 安定群因子間相関

	人当たり_N1	人当たり_N2	人当たり_h1	人当たり_h2
人当たり_N1	1.000			
人当たり_N2	.716 **	1.000		
人当たり_h1	.714 **	.615 **	1.000	
人当たり_h2	.475 **	.635 **	.638 **	1.000
	人付き合い_N1	人付き合い_N2	人付き合い_h1	人付き合い_h2
人付き合い_N1	1.000			
人付き合い_N2	.778 **	1.000		
人付き合い_h1	.749 **	.611 **	1.000	
人付き合い_h2	.605 **	.721 **	.645 **	1.000
	社会適応力_N1	社会適応力_N2	社会適応力_h1	社会適応力_h2
社会適応力_N1	1.000			
社会適応力_N2	.730 **	1.000		
社会適応力_h1	.771 **	.604 **	1.000	
社会適応力_h2	.629 **	.656 **	.641 **	1.000
	見た目_N1	見た目_N2	見た目_h1	見た目_h2
見た目_N1	1.000			
見た目_N2	.777 **	1.000		
見た目_h1	.898 **	.725 **	1.000	
見た目_h2	.742 **	.885 **	.715 **	1.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

表 1 - 2 変動群因子間相関

	人当たり_N1	人当たり_N2	人当たり_h1	人当たり_h2
人当たり_N1	1.000			
人当たり_N2	-.082	1.000		
人当たり_h1	.746 **	.009	1.000	
人当たり_h2	.174	.651 **	.289 *	1.000
	人付き合い_N1	人付き合い_N2	人付き合い_h1	人付き合い_h2
人付き合い_N1	1.000			
人付き合い_N2	-.120	1.000		
人付き合い_h1	.662 **	.039	1.000	
人付き合い_h2	.051	.408 **	.222	1.000
	社会適応力_N1	社会適応力_N2	社会適応力_h1	社会適応力_h2
社会適応力_N1	1.000			
社会適応力_N2	-.052	1.000		
社会適応力_h1	.773 **	-.063	1.000	
社会適応力_h2	.374 **	.450 **	.470 **	1.000
	見た目_N1	見た目_N2	見た目_h1	見た目_h2
見た目_N1	1.000			
見た目_N2	.017	1.000		
見た目_h1	.850 **	.077	1.000	
見た目_h2	.211	.575 **	.310 *	1.000

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

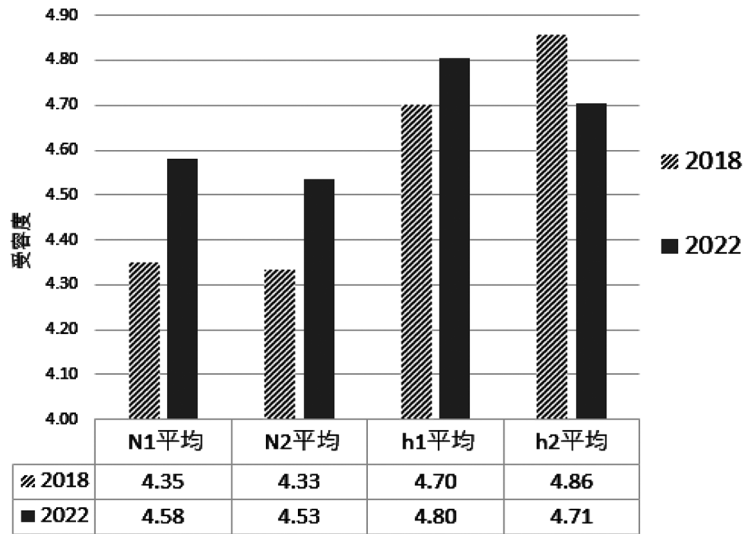


図1 年別別全因子の平均受容度

その結果3クラスターに分けられた。クラスター1は146名中66名が所属し、人当たり因子がやや平均を下回るが、全体的に平均的な値をとる。クラスター2は15名が所属し、全体が平均より受容的な値をとる。クラスター3は65名が所属し、逆に全体が平均を下回りやや非受容的な値をとった。

なお、分類を回答者ではなく変数にして、クラスター分析をすると、クラスター数が4

の場合は各クラスターの所属メンバーが以下のようになる。クラスター1が人当たり因子の_N1, _N2, _h1, _h2に、クラスター2が人付き合い_N1, 人付き合い_N2, 社会適応力_N1, 社会適応力_N2, クラスター3が人付き合い_h1, 人付き合い_h2, 社会適応力_h1, 社会適応力_h2, クラスター4は見た目の_N1, _N2, _h1, _h2になった。

クラスター数を3にすると、第Iクラス

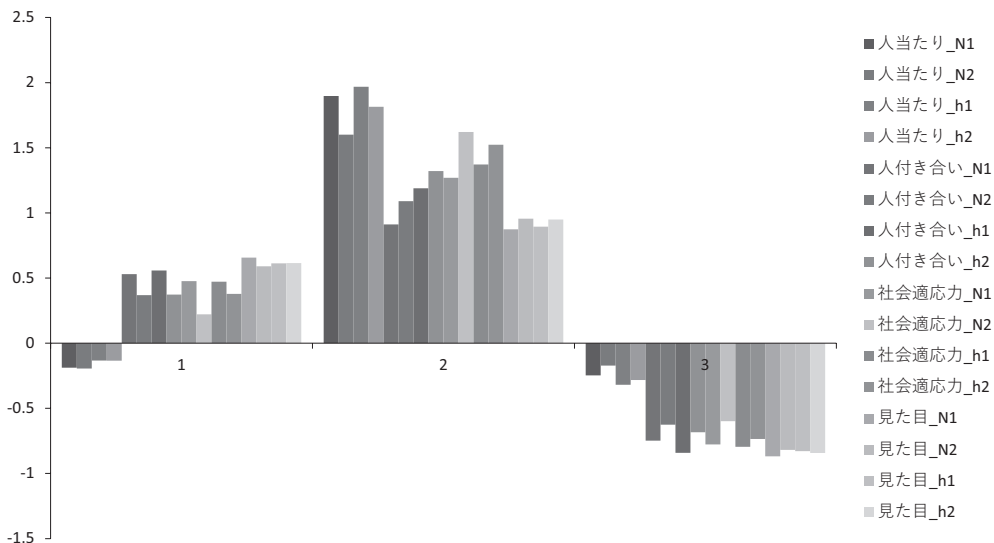


図2 ウォード法による安定群の因子別対象別回別値のクラスター分析の結果

ターが人当たり因子_N1, _N2, _h1, _h2, 第3クラスターが見た目因子_N1, _N2, _h1, _h2, 残りが第2因子の所属メンバーとなり、整然とした結果になった。

一方、変動群においては、クラスター数を4にしても3にしてもこのような整然とした結果にならなかった。

ベクトルグラフによる結果

さらにクラスターの性質を細かく見るために、ベクトルグラフを作成した。

対健常と対障害のデータを座標にみため、1回目から2回目にどのような変化をするのかを示した。すなわち、例えば「人当たり」因子で考えると、(人当たり_N1の値, 人当たり_h1の値)を起点として(人当たり_N2の値, 人当たり_h2の値)を終点とするベクトルを描いた。

対健常(_N1, _N2)の値がX軸で、対障害(_h1, _h2)の値がY軸になっている。目盛は

両軸とも受容度となっている。従って左下から右上までのY = Xの線を引いたとして、その線より上側にあれば、対障害の受容度が対健常の受容度より上回っていることがわかる。

クラスター1ではY = Xの線より上側に、クラスター3では中央からやや下寄りになっていた。クラスター2では最大値(7)に近い値を示していた。特に見た目因子ではグラフが描けないほど上にかたよっていた。

また人当たり因子だけはかなり左下に寄っていることがわかる。

なお、変動群では変化の方向も長さも明確な特徴がなかった。

対健常と対障害の差について

4因子の1回目と2回目の対健常と対障害およびその差を求めた(表2)。

表2の因子名の後ろの番号は回を表わし、差(h-N)は、対障害から対健常の値を引い

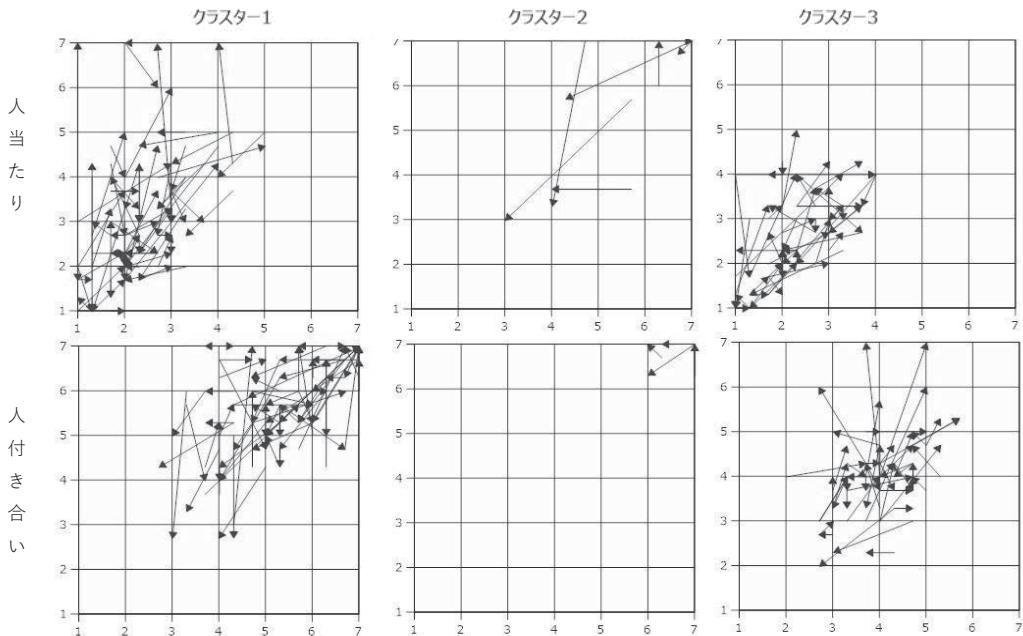


図3-1 ベクトルグラフの図(説明本文)

たものである。この値が大きいほど、2者間での受容度の差が大きい因子であることを示している。その結果、人当たり因子と社会適応力因子において、相対的に大きな差が見られた。すなわち人当たりが悪くても受容できる、社会適応力が低くても受容できるということである。これに反し見た目因子はほぼ差がみられない。中程度の差が人付き合い因子であった。また1回目と2回目の差が比較的大きいのは、人付き合い因子と社会適応力因子であった。

その他の要因の変化について

回答の際に想起した障害の種類については知的障害が最も多く61名、ついで障害全般42名、身体障害24名、精神障害17名、その他2名だった。年度の違いは見られなかった。

障害者との接触経験については「あり」が74名、「なし」が72名とほぼ半数に接触経験が見られた。これも年度による違いは見られ

表2 対健常と対障害の差について（説明本文）

因子名	対健常N	対障害h	差(h-N)
人当たり_1	2.42	2.96	0.53
人当たり_2	2.48	3.02	0.54
人付き合い_1	4.93	5.13	0.20
人付き合い_2	4.87	5.20	0.33
社会適応力_1	4.64	5.03	0.40
社会適応力_2	4.58	5.06	0.47
見た目_1	5.89	5.89	0.00
見た目_2	5.81	5.83	0.02

なかった。

障害者との接触経験「あり」のうち63名が偶発的で自発的と答えたのは11名であった。年度の違いは見られなかった。

再接触希望の有無と他の変数との関係は、自発的に接触した場合は、受容度の程度とは関係ないように思われる（表3）。

偶発的に接触した場合にはその接触の快適度が4以下の場合（普通以下の場合）、再接

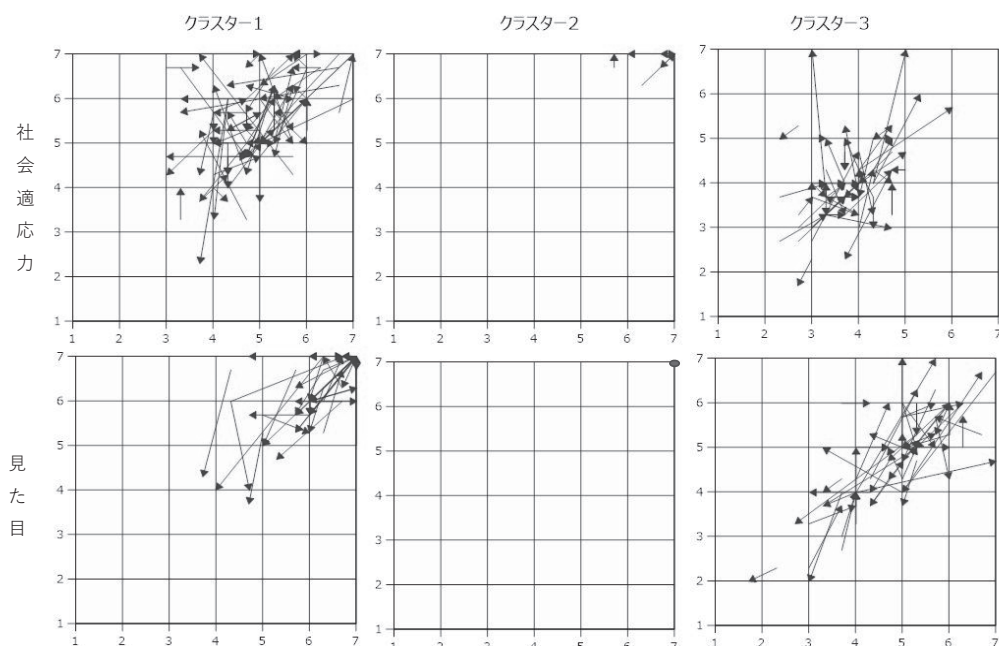


図3-2 ベクトルグラフの図（説明本文）

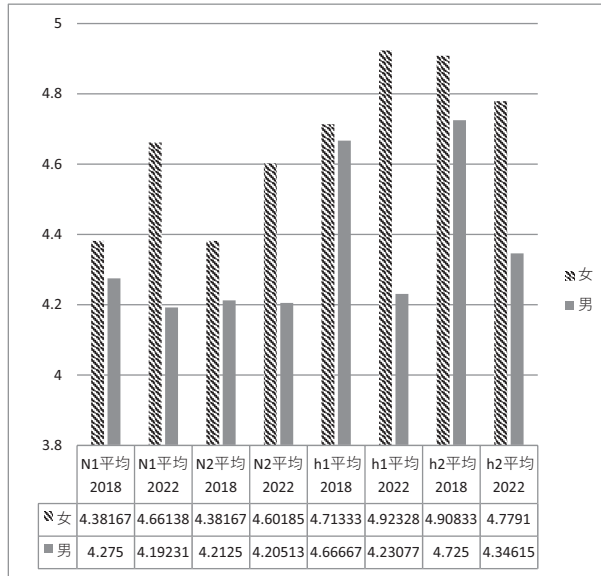


図 4 男女別年別受容度

触希望が「なし」になる傾向が強いように思われる。逆に快適度が普通以上の場合再接触希望「あり」になるようである。これも特に年次には関係が無いように思われる（表3）。

性差については、年度にかかわらず、一貫して女性（図4の斜線棒）が男性より受容度が高い結果となった。

[考察]

安定群と変動群について

質問項目が12項目（4因子）あるので、対健常について12項目全てが1だけずれた場合を境界値として、安定群と変動群に分けた。それ以上回答がずれると信頼性が乏しいと見なした。もちろん何らかの理由があって、誠実に回答した結果の場合もあると思われるが、大学生対象で、講義の前後に短時間でいう質問紙調査では不誠実な回答もあり得るのではないかと考えたからである。なお、対障害については、2回の調査の間に初めて障害者と接した場合など変動する要因が色々考えられるので、群分けの際の指標とはしなかつ

た。

今回のデータについては、再検査信頼性を示す相関係数の値よりも同時期に回答した因子間相関の値が大きい場合があること、また、ベクトルグラフの結果から、2群に分け、信頼性の高いと思われる群（安定群）を中心に分析するのはある程度妥当なように思われる。

調査において、指標の信頼性が非常に重要である（村上，2006など）ことから、今後このような手法を採用することの是非について検討をすることは重要であろう。

196名中146名（約3/4）しか誠実な回答が得られないとすると、大学生を調査協力者とすることが多い、心理学や教育学、社会福祉学などの研究にかなり大きな影響を与えると考えられるからである。いずれにせよ、信頼できる被験者をより分ける工夫がなされなければならない。

対健常と対障害の差について

次に、今回の分析において、対障害のみならず対健常のデータを得たのは、心理学研究

法の基本である、対照群の設定という意味があった。例えば表2からは対障害のデータのみからは、人当たりについては最も受容度が低いので、人当たりの悪さは、障害者にとってあまり許容されない要因であるとされてしまいそうであるが、対健常のデータと比較することにより、受容度は低いながらも健常者よりも受容されている要因であり、その差(h-N)を見ても他の因子より受容される程度が大きいという大分見え方の異なる結果が得られた。

その他の要因について

不快な経験は、否定的態度に結びつくと言ったのは Okolo and Guskin (1984) であった。

今回の表3の再接触希望についてはこの研究結果を支持しているといえよう。

性差については、以前より、男性より女性の方が障害者に対してより好意的に評価して

いるという研究が多く(生川;1995, 生川・那須;2001, 豊村;2004など), さらに豊村(2004)では、因子ごとではなく項目ごとに性差を調べているが、そのほとんどの項目で「男性<女性」になったと述べている。また、生川(1995)でも生川・那須(2001)でも性差に関しては男性よりも女性の方が高いと述べていた。

今回はそれらを支持する結果になった。

なお、調査年次については、内容は同一であるが、調査方法が異なっていた。即ち2018年は1回目、2回目とも質問紙による対面調査であったが、2022年は新型コロナウイルス蔓延の影響で1回目はWEBで実施、2回目は同じくWEBを使用した。教室で対面講義終了後にその場でWEB入力させた。内容表現等は可能な限り合わせた。これらの調査方法の違いが結果に影響を与えた可能性は残る。

表3 再接触希望者の内訳(説明本文)

再接触希望	2018			2022			総計
	あり	なし	2018小計	あり	なし	2022小計	
偶発的							
2		2	2		1	1	3
3		2	2	1	3	4	6
4	10	3	13	12	9	21	34
5	3		3	2	1	3	6
6	3		3	4		4	7
7	3	1	4	3		3	7
偶発的 集計	19	8	27	22	14	36	63
自発的							
3	1		1				1
4	1	1	2	1		1	3
5	2		2				2
6	1		1	1		1	2
7				3		3	3
自発的 集計	5	1	6	5		5	11
総計	24	9	33	27	14	41	74

〔引用文献〕

- ・加藤司 (2007), 心理学の研究法 - 実験法・測定法・統計法 -, 北樹出版
- ・川間健之介 (1996), 障害をもつ人に対する態度研究の現状と課題, 特殊教育学研究, 34, pp.59-68
- ・村上宣寛 (2006), 心理尺度の作り方, 北大路書房
- ・生川善雄 (1995), 精神遅滞児(者)に対する健常者の態度に関する多次元的研究 - 態度と接触経験, 性, 知識との関係 -, 特殊教育学研究32, pp.11-19
- ・生川善雄・那須理絵 (2001), 知的障害者に対する大学生の態度構造 - 専攻, 性と関連づけての検討 -, 東海大学健康科学部紀要第7号, pp.45-51
- ・Okolo,C.and Guskin,S.(1984), Community attitudes toward community placement of mentally retarded persons. International Review of Research in Mental Retardation, 12, pp.25-66.
- ・清水裕士 (2016), フリーの統計分析ソフト HAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実施二P 蹴る利用方法の提案, メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, pp.59-73
- ・豊村和真 (2004), 学生の障害児者に対する受容的態度に関する研究 (第1報), 北星学園大学社会福祉学部北星論集第41号, pp.85-98
- ・豊村和真 (2006), 学生の障害児者に対する受容的態度に関する研究 (第3報), 北星学園大学社会福祉学部北星論集第43号, pp.119-132
- ・豊村和真 (2014), 大学生の障害者に対する意識, 日本応用心理学会第71会大会発表論文集
- ・豊村和真 (2022), 障害者との共生に関する大学生の意識の変化, 日本応用心理学会第88大会発表論文集

〔資料〕

資料 群別要約統計量

変数名	安定群 (N=146)				変動群 (N=50)			
	平均値	SD	最小値	最大値	平均値	SD	最小値	最大値
人当たり_N1	2.42	1.25	1.00	7.00	2.83	1.43	1.00	6.33
人当たり_N2	2.48	1.11	1.00	7.00	2.70	1.31	1.00	7.00
人当たり_h1	2.96	1.46	1.00	7.00	3.29	1.64	1.00	7.00
人当たり_h2	3.02	1.47	1.00	7.00	3.31	1.72	1.00	7.00
人付き合い_N1	4.93	1.30	2.00	7.00	4.98	1.51	1.00	7.00
人付き合い_N2	4.87	1.22	2.67	7.00	4.75	1.39	1.00	7.00
人付き合い_h1	5.13	1.31	2.33	7.00	5.45	1.36	2.67	7.00
人付き合い_h2	5.20	1.31	2.00	7.00	5.11	1.27	2.33	7.00
社会適応力_N1	4.64	1.20	2.33	7.00	4.69	1.50	1.33	7.00
社会適応力_N2	4.58	1.01	2.33	7.00	4.31	1.22	1.00	7.00
社会適応力_h1	5.03	1.26	2.33	7.00	5.21	1.41	2.00	7.00
社会適応力_h2	5.06	1.23	1.67	7.00	4.96	1.34	2.33	7.00
見たい目_N1	5.89	1.21	2.33	7.00	5.89	1.33	3.00	7.00
見たい目_N2	5.81	1.22	1.67	7.00	5.58	1.38	1.00	7.00
見たい目_h1	5.89	1.23	2.33	7.00	6.03	1.24	3.00	7.00
見たい目_h2	5.83	1.24	2.00	7.00	5.80	1.19	2.67	7.00

資料 質問項目（Ⅰは対健常，Ⅲは対障害）

Ⅰ. あなたの住んでいる地域に、これからAさんという人が住もうとしています。

もしAさんが以下のような人だった場合、同じ地域で暮らしていく上であなたはAさんのことをどの程度受け入れられますか？ 当てはまる数字に○をつけて下さい。

	不可						可
(1) 意地悪な人	1	2	3	4	5	6	7
(2) 地域活動に参加しない人	1	2	3	4	5	6	7
(3) 周りから孤立している人	1	2	3	4	5	6	7
(4) 顔立ちが整っていない人	1	2	3	4	5	6	7
(5) 不快なことをする人	1	2	3	4	5	6	7
(6) 近所付き合いをしない人	1	2	3	4	5	6	7
(7) 働いていない人	1	2	3	4	5	6	7
(8) カッコわるい人	1	2	3	4	5	6	7
(9) 和をみだす人	1	2	3	4	5	6	7
(10) 社会的でない人	1	2	3	4	5	6	7
(11) 会話が成り立たない人	1	2	3	4	5	6	7
(12) 可愛くない人	1	2	3	4	5	6	7

Ⅲ. あなたの住んでいる地域に、これからBさんという 障害者 が住もうとしています。

もしBさんが以下のような人だった場合、同じ地域で暮らしていく上であなたはBさんのことをどの程度受け入れられますか？ 当てはまる数字に○をつけて下さい。

	不可						可
(1) 可愛くない人	1	2	3	4	5	6	7
(2) 会話が成り立たない人	1	2	3	4	5	6	7
(3) 社会的でない人	1	2	3	4	5	6	7
(4) 和をみだす人	1	2	3	4	5	6	7
(5) カッコわるい人	1	2	3	4	5	6	7
(6) 働いていない人	1	2	3	4	5	6	7
(7) 近所付き合いをしない人	1	2	3	4	5	6	7
(8) 不快なことをする人	1	2	3	4	5	6	7
(9) 顔立ちが整っていない人	1	2	3	4	5	6	7
(10) 周りから孤立している人	1	2	3	4	5	6	7
(11) 地域活動に参加しない人	1	2	3	4	5	6	7
(12) 意地悪な人	1	2	3	4	5	6	7

